

過去七仏と宿命智

天 野 信

初期仏典における過去七仏思想は、長部・長阿含に収録される大本経と呼ばれる一連の經典によって完全に確立される⁽¹⁾。本稿では、大本経のパーリ伝承である *Mahāpadānasuttanta*（以下MAPと表記する）の冒頭を飾るプロローグとなる「宿命（過去の生存）に関わる法話」に着目する。このプロローグは、後代に付加されたものであるため、他の諸本のプロローグとは内容が異なる。MAP のプロローグについて、五世紀にブッダゴーサが作成したパーリ註釈書の記述を確認すると、初期仏教における解脱智としてひろく知られる「三明（宿命智、生死智、漏尽智）」の第一智である「宿命智」（過去の生存を知る智）が重要となってくる。このことから、上座部大寺派では、ある時期から、過去七仏と宿命智との関連性が重視されていたと考えられる。

一方で、北伝仏教の部派となる法蔵部所伝の漢訳本である『大本経』にも、MAPと同様に、過去七仏と宿命智との関連性を示す記述が確認できる。

本稿では以上の事柄に着目し、過去七仏と宿命智との関連性について検討する。その際、三明説が、初期仏教における成仏伝承において不可欠なものであることに留意して議論を進める。

I

まず、MAPの内容・構成を簡略的に示しておこう。

〈1〉比丘たちの間で宿命に関する法話が起こる。それに答える形で、釈尊が、過去六仏（ヴィパッシン、シキン、ヴェッサブー、カクサンダ、コーナーガマナ、カッサバ）および釈尊自身の出現した時代（劫）、出自、姓、寿命、菩提樹、二大弟子、サンガの構成、侍者、父母、王都の名称を、比丘たちに述べる。（以下この箇所を「七仏の事蹟」と呼ぶ。）このあと、一度、釈尊は比丘たちの前から去る。〈2〉再び現れた釈尊は、第一仏であるヴィパッシン仏の伝記を、比丘たちに語り始める。（以下この箇所を「ヴィパッシン仏伝」と呼ぶ）〈3〉浄居天の神が、過去仏の事蹟を釈尊に報告する。（以下この箇所を「浄居天の神の報告」と呼ぶ。）

上記の如く、i「七仏の事蹟」→ii「ヴィパッシン仏伝」→iii「浄居天の神の報告」という構成となっている。⁽²⁾

MAPおよび対応する諸本との比較研究から、「浄居天の神の報告」は、本来は「七仏の事蹟」の直後に位置するものであり、i「七仏の事蹟」→ii「浄居天の神の報告」という構成の文献が、現行のMAP編纂以前に存在し、後に「ヴィパッシン仏伝」が挿入されたことによって、現在の構成となったことが指摘されている。⁽³⁾

吹田隆道氏は、従来「釈尊の教法に永遠性を持たすために過去仏を紹介するもの」とみなされていたMAPおよび対応諸本について、「本経が具体化していく七仏自体に何らかの展開をもたらすもの」という新たな見解を示した。⁽⁴⁾そして、「七仏の事蹟」および dhammatā (skt. dharmatā, 「常法」) という用語によって、「すべてのブッタの生涯には共通する事項がある」という法則が構築され、それは「すべてのブッタの生涯は共通する」という考えに発展していき、ブッタたるもののさらなる前例として、「ヴィパッシン仏伝」が付け加えられたことを明らかにした。⁽⁵⁾

本稿では、七仏の事蹟が説示される前にある、MAP冒頭のプロローグに着目する。以下にその内容を挙げていく。

[資料 1]

Atha kho sambahulānaṃ bhikkhūnaṃ pacchā-bhattaṃ piṇḍapāta-paṭikkantānaṃ Kareri-maṇḍala-māle sannisinnānaṃ sannipatitānaṃ pubbe-nivāsa-paṭisaṃyuttā dhammī kathā udapādi: ‘Iti pubbe-nivāso iti pubbe nivāso ti.’ (MAP, p. 1)

さて、多くの比丘たちが、食後に、托鉢食からもどって、カレーリ講堂に集まって坐っていたときに、宿命に関する法話が起った。「宿命はこのようなであった、宿命はこのようなであった」と。

[資料 2]

Assosi kho Bhagavā dibbāya sota-dhātuyā visuddhāya atikkanta-mānusikāya tesaṃ bhikkhūnaṃ imaṃ kathā-sallāpaṃ. Atha kho Bhagavā uṭṭhāy’ āsanā yena Kareri-maṇḍala-mālo ten’ upasaṃkami, upasaṃkamitvā paññatte āsane nisīdi. Nisajja kho Bhagavā bhikkhū āmantesi: ‘Kāya nu ’ttha bhikkhave etarahi kathāya sannisinnā, kā ca pana vo antarā kathā vippakatā ti?’ (MAP, p. 1)

世尊は、清浄であり非凡である天の耳界によって、かの比丘たちのこの会話を聞いた。そこで世尊は、坐具から立ち上がって、カレーリ講堂に近づいていった。近づくと、設けられた坐具に坐った。坐ってから世尊は比丘たちに話しかけた。「比丘たちよ、どのような話があって、今、ここに集まり、坐っているのですか。また、あなたたちが中断した談話は何ですか」と。

Evaṃ vutte te bhikkhū bhagavantam etad avocuṃ: ‘idha bhante amhākaṃ pacchā-bhattaṃ piṇḍapāta-paṭikkantānaṃ kareri-maṇḍala-māle sannisinnānaṃ sannipatitānaṃ pubbe-nivāsa-paṭisaṃyuttā dhammī kathā udapādi: “iti pubbe-nivāso iti pubbe nivāso ti.” Ayaṃ kho no bhante antarā kathā vippakatā atha bhagavā anuppatto ti.’

(MAP, pp. 1-2)

このように言われて、かの比丘たちは、世尊にこう述べた。「尊師よ、我々は食後に、托鉢食からもどって、このカレーリ講堂に集まり、坐っていたときに、宿命に関する法話が起きました。『宿命はこのようである。また、宿命はこのようである』と。尊師よ、これが我々の中断した談話であり、そのとき、世尊がおいでになりました」と。

‘Iccheyyātha no tumhe bhikkhave pubbe-nivāsa-paṭisaṃyuttaṃ dhammiṃ kathaṃ sotun ti?’ ‘Etassa Bhagavā kālo, etassa Sugata kālo, yaṃ bhagavā pubbe-nivāsa paṭisaṃyuttaṃ dhammiṃ kathaṃ kareyya, Bhagavato sutvā bhikkhu dhāressantīti.’ ‘Tena hi bhikkhave suṇātha, sādhukaṃ manasikarotha, bhāssissāmīti.’ ‘Evaṃ bhante’ ti kho te bhikkhu Bhagavato paccassosun. (MAP, p. 2)

「比丘たちよ、あなた方は、宿命に関する法話を聞きたいですか？」

「世尊、そのために適した時です。善逝、そのために適した時です。世尊が、宿命に関わる法話をなさったら、比丘たちは、世尊の〔宿命に関わる法話を〕聞いて、〔その内容を〕保持いたします」「比丘たちよ、それでは聞きなさい。十分に注意しなさい。私は〔宿命に関わる法話を〕話しましょう」「わかりました。尊師」と、かの比丘たちは世尊に答えた。

上記の資料にある、「過去の生存」を意味する「宿命 (pubbe-nivāsa)」は、初期仏教における解脱智として知られる三明 (宿命智、生死智、漏尽智) のうち、第一智である「宿命智」に用いられる用語である。このあと、「宿命 (過去の生存) に関わる法話」として、「七仏の事蹟」が、釈尊によって語られることになる。ここに記載される七仏それぞれの事蹟は、以下の通りである (MAP, pp. 2-7)⁽⁶⁾。

(1)出現した時代 (2)出自 (3)姓 (4)寿命 (5)菩提樹 (6)二大弟子 (7)サンガの構成 (8)侍者 (9)父母および王都の名称

「七仏の事蹟」の説示が終わると、釈尊は一度、比丘たちの前から去る。

[資料3]

Idam avoca Bhagavā. Idam vatvā Sugato uṭṭhāy' āsanā vihāraṃ pāvisi. (MAP, p.7)

世尊は「七仏の事蹟について」このように語られた。このように語られると、善逝は坐具から立ち上がり、精舎に入っていった。

ここまで見てきたMAPのプロローグは、大本経諸本および同内容を保持する諸漢訳文献を比較した結果、物語統一のために、後代に付加されたものであったことが明らかとなっている。⁽⁷⁾本来のプロローグである「過去仏に関する比丘たちの談話」は、MAPでは、七仏の事蹟とヴィパッシン仏伝との間に移動している⁽⁸⁾のである。そして、比丘たちの前に再び現れた釈尊は、第一仏である「ヴィパッシン仏伝」を、比丘たちに語り始めることになる。

本稿の次節では、MAPに新たに設置されたプロローグの内容が、上座部大寺派所伝の註釈書ではどのように伝承されていったかを考察していくことにする。

II

MAPの註釈書には、ブッダゴーサ（五世紀）の著作とされる長部註に収録される *Mahāpadānasuttanta-aṭṭhakathā* ⁽⁹⁾がある。既に挙げたMAPのプロローグに対する本書の註釈記述を見ていこう。⁽¹⁰⁾以下に挙げる「資料4」は、「資料1」に対する註釈となる。

[資料 4]

Pubbe-nivāsa-paṭisaṃyuttā ti ekam pi jātiṃ dve pi jātiyo ti evaṃ vibhattena pubbe-nivuttha-kkhandha-santāna-saṅkhātena pubbe-nivāsenā saddhiṃ yojetvā pavattitā. *Dhammī* ti dhamma-saṃyuttā. *Udapādi* ti aho acchariyaṃ Dasabalassa pubbe-nivāsa-ñāṇaṃ. Pubbe-nivāsaṃ nāma ke anussaranti, ke nānussaranti? Titthiyā anussaranti, sāvakā pacceka-buddhā buddhā anussaranti. Katarā titthiyā anussaranti? Ye agga-pattā kamma-vādino te pi cattālisaṃ yeva kappe anussaranti. Sāvakā kappa-sata-sahassaṃ anussaranti. Dve agga-sāvakā asaṅkheyyaṃ c' eva kappa-sata-sahassaṃ ca, paccekabuddhā dve asaṅkheyyāni kappa-sata-sahassaṃ ca. Buddhānaṃ pana: Ettakan ti, paricchedo n' atthi, yāvatakaṃ ākankhanti tāvatakaṃ anussaranti. (*Sumaṅgalavilāsinī*, vol.2, PTS, pp. 407-408)

「宿命に関する」とは、一生でも、二生でも、といったように区分されている過去に住した [五] 蘊の相続と呼ばれる宿命を、一緒に結びつけて確立したことをいう。「法 [話]」とは法に関する [話の] ことである。

「起こった」とは、ああ！ [と感嘆の声がでるくらいに] 希有なものである十力者 (仏) の宿命智のことである。実に、誰が宿命を記憶し、誰が記憶しないのか。異教者たちは記憶している。声聞たちも独覚たちも仏たちも記憶している。どのような異教者たちが記憶しているのか。第一達成業論者たちは四十劫のみを記憶している。声聞たちは十万劫を記憶している。二人の最上弟子たち (サーリプッタとモッガラナ) は阿僧祇と十万劫を、独覚たちは二阿僧祇と十万劫を [記憶している]。しかし仏たちにはこれだけという制限がなく、望むがまま記憶している。

Titthiyānaṃ pubbe-nivāsa-ñāṇaṃ khajjopanakā-kimi-obhāsa-sādisaṃ, sāvakānaṃ pana padīp' obhāsa-sadisaṃ, agga-sāvakānaṃ osadhi-tārak' obhāsa-sadisaṃ, pacceka-buddhānaṃ cand' obhāsa-

sadisam, Buddhānan sarada-suriya-maṇḍal' obhāsa-sadisam. (*Sumaṅgalavilāsinī*, vol.2, PTS, p. 409)

異教者たちの宿命智は螢の光のようであり、声聞たちのものは燈明の光のようであり、最上弟子たちのものは明星の光のようであり、独覺たちのものは月の光のようであり、仏たちのものは秋（雨期明け）の太陽の光のようである。

このように、「宿命智 (pubbe-nivāsa-ñāṇa)」が大きな役割を担っている。なお、ここでの記載内容は、同じくブッダゴーサの著作とされている *Visuddhimagga* にも、類似の内容が存在する (*Visuddhimagga*, PTS, pp. 410-411)。また、次に挙げる [資料 5] も、[資料 1] を対象とした註釈内容である。

[資料 5]

Aho mahantaṃ Bahagavato pubbe-nivāsa ñāṇan ti, evaṃ Bhagavantaṃ yeva ārabhha kathā uppannā jātā pavattitā ti attho. taṃ sabbam pi saṅkhepato dassetuṃ iti pi pubbe-nivāso ti ettakam eva pāḷiyaṃ vuttaṃ. (*Sumaṅgalavilāsinī*, vol.2, PTS, p. 409)

ああ、世尊の宿命智はなんとも偉大なものであろうか、と、このように世尊 [の宿命智] に関してのみの話が生起し、発生し、確立した、という意味である。そのすべてを省略して示すために、「宿命とはこのようであった」といったことだけが、パーリ（聖典）で述べられているのである。

比丘たちの談話を、天の耳界によって聞いたブッダが現れたという [資料 2] に対する註釈箇所では、中断された比丘たちの談話を、『梵網經』の記事と区別するために以下の註釈がある。

[資料 6]

Assosi kho ... pe ... atha Bhagavā anuppatto ti ettha yaṃ vattabbaṃ taṃ Brahmajāla-vaṇṇanāyaṃ vuttam eva. Ayaṃ eva hi viseso. Tattha sabbaññuta-ñāṇena assosi, idha dibbasotena. Tattha ca vaṇṇāvaṇṇakathā vippakatā, idha pubbenivāsa-kathā. Tasmā Bhagavā: Ime bhikkhū mama pubbenivāsa-ñāṇaṃ ārabhha guṇaṃ thomenti, pubbe-nivāsa-ñāṇassa pana me nipphattiṃ na jānanti, handa tesāṃ tassa nipphattiṃ kathetvā dassāmi ti, āgantvā pakatiyā pi Buddh’āsane nisīditvā dhamma-desan’ attham eva ṭhapite taṃ khaṇaṃ yeva bhikkhūhi papphoṭetvā dinne vara-buddh’ āsane nisīditvā: Kāya nu’ ttha bhikkhave ti, pucchāya ca: Idha bhante ti, ādito paṭivacanassa ca pariyosāne tesāṃ pubbenivāsa-patisanyuttaṃ dhamma-kathaṃ kathetu-kāmo: Iccheyyātha no ti, ādim āha. (Sumaṅgalavilāsini, vol.2, PTS, pp. 409-410)

「[世尊は] 聞いた…… (中略) ……そのとき、世尊が現れた」と[あるが]、ここでは梵網[經]註釈で述べられることこそ説明すべきである。これには実に区別がある。そこ(梵網經)では、[世尊は中断された比丘たちの談話を]一切知智によって聞かれたが、ここでは、天耳による。また、そこでは、称赞・非難の話が中断されたが、ここでは宿命の話[が中断されたので]である。それゆえ、世尊は、「この比丘たちは、私の宿命智に関しての徳を称赞している。しかし、彼らは私の宿命智の完成をしらない。さあ、私は彼らにその完成を語って示そう」と、おのずとやって来て、仏の坐具に坐って、説法の意味のみを[示すために]、まさにその瞬間に、比丘たちが[埃を]たたいて用意した最高の仏の坐具に坐って、「ここに集まった比丘たちよ」と質問し、そして「尊師よ、ここに」という最初に完結した彼らの回答には、宿命に関する法話について言及する欲求が存在したのである。[そのため]「あなた達は[宿命に関わる法話を]希望しますか」と[世尊は]最初に言った

のである。

そして、「七仏の事蹟」の説示が終わり、釈尊が、一度、比丘たちの前から去る〔資料3〕については、以下の註釈がある。

〔資料7〕

Vihāraṃ pāvisi ti kasmā pāvisi? Bhagavā kira ettakaṃ kathetvā cintesi: Na tāva mayā sattannaṃ Buddhānaṃ vaṃso niraṇṭaraṃ matthakaṃ pāpetvā kathito, ajja mayi pana vihāraṃ pavitthe ime bhikkhū bhiyyoso-mattāya pubbenivāsa-ñāṇaṃ ārabha vaṇṇaṃ kathayissanti. Athāhaṃ āgantvā niraṇṭaraṃ Buddhavaṃsaṃ kathetvā matthakaṃ pāpetvā dassāmi ti, bhikkhūnaṃ kathā-vārassa okāsaṃ datvā utthāy' āsanā vihāraṃ pāvisi. (Sumaṅgalavilāsini, vol.2, PTS, p. 421)

「精舎に入っていった」とは、なぜ、精舎に入ったのか。伝えによれば、世尊はこれだけを語り、考えた。「まず、私は七仏の伝統を間断なく頂点に到達させて語ってはいない。然るに、今、私が精舎に入れば、この比丘たちは、さらに宿命智に関して、称賛し語るであろう。そのとき、〔再度〕私が来て、間断なく仏の伝統を説明して、頂点に到達させて与えればよいであろう」と、比丘たちに談話の機会となる場所を与え、坐具から立ち上がり、精舎に入られたという。

ここまで挙げた註釈書の内容から、新たなプロローグが配置されたMAPは、上座部大寺派において、仏が備える宿命智の偉大さを示す経典として位置づけられていることは明白である。

一方、本来のプロローグである「過去仏に関する比丘たちの談話」が、正規の位置（経典の冒頭）にある法蔵部所伝の『大本経』⁽¹¹⁾にも、宿命智によって、釈尊が過去仏の事蹟を認知していることが記されている。その記述は、

プロローグの後、「七仏の事蹟」が比丘たちに語られる直前にある。

[資料 8]

汝等欲聞如來識宿命智知於過去諸佛因緣不。我當說之。(T1, p. 1c)

さらに『大本經』では、ヴィパッシン仏伝が始まる箇所にも以下の記述がある。

[資料 9]

爾時世尊告諸比丘。吾今欲以宿命智說過去佛事。汝欲聞不。(T1, p. 3c)

このように、上座部大寺派だけではなく、北伝仏教の部派である法蔵部においても、過去七仏と宿命智との関連性が認められる。⁽¹²⁾

III

初期仏教における三明の成立と、その展開については、すでに詳細な検討がある。⁽¹³⁾ また、三明説を用いた成仏伝承の変容過程も、ほぼ明らかとなっている。阿含や律には、異なる形式の成仏伝承が複数存在するが、定型的な成仏伝承としては、四諦の認識を述べる「四諦型三明説」と、縁起の認識を述べる「縁起成仏説」との二つが挙げられる。そして、上座部大寺派では、「四諦型三明説」と「縁起成仏説」とを接合して出来上がった「縁起型三明説」が正統な成仏伝承となったことが指摘されている。⁽¹⁴⁾

さて、成仏伝承における「四諦型三明説」は、菩薩時代の釈尊が、四禪を経て、初夜に宿命智、中夜に生死智を獲得し、後夜に四諦を認識して漏尽智を獲得して成仏する内容となる。ここでは、*Bhayabheravasutta* (MN. no. 4) にある以下の記述を挙げておこう。⁽¹⁵⁾ ここには七仏の事蹟に関連する内容も含まれている。

[資料10]

So evaṃ samāhitte citte parisuddhe pariyodāte anaṅgaṇe vigatūpak-
kilese mudubbhūte kammaniye t̥hite ānejjappatte pubbenivāsānus-
satiñāṇāya cittaṃ abhininnāmesim̐. So anekavihiṭaṃ pubbenivāsaṃ
anussarāmi, seyyathidaṃ: ekaṃ pi jātiṃ dve pi jātiyo tisso pi jātiyo
catasso pi jātiyo pañca pi jātiyo dasa pi jātiyo vīsatiṃ pi jātiyo
tiṃsaṃ pi jātiyo cattārīsaṃ pi jātiyo paññāsaṃ pi jātiyo jātisatam pi
jātisahassaṃ pi jātisatasahassaṃ pi, aneke pi saṃvaṭṭakappe aneke
pi vivaṭṭakappe aneke pi saṃvaṭṭavivaṭṭakappe; amutr' āsim̐ evan-
nāmo evaṃgotto evaṃvaṇṇo evamāhāro evaṃ sukhadukkhaṇi-
saṃvedī evamāyupariyāto, so tato cuto amutra uḍapādiṃ, tatra p'
āsim̐ evannāmo evaṃgotto evaṃvaṇṇo evamāhāro evaṃ sukhadu-
kkhaṇisaṃvedī evamāyupariyāto, so tato cuto idhūpapanno ti. Iti
sākāraṃ sa-uddesaṃ anekavihiṭaṃ pubbenivāsaṃ anussarāmi.
Ayaṃ kho me brāhmaṇa rattiyaṃ paṭhame yāme paṭhamā vijjā ad-
higatā. avijjā vihatā vijjā uppannā. tamo vihato āloko uppanno, yathā
taṃ appamattassa ātāpino pahitattassa viharato. (*Majjhimanikāya*,
vol.1, PTS, p. 22)

このようにして、心が安定し、清浄となり、清白となり、汚れがなく、
無垢となり、柔軟になり、[行動に] 適し、安定して不動のものになっ
たときに、その私は、宿命随念智に心を向けたのである。その私は、
種々なる宿命を以下のように記憶したのである。一生でも、二生でも、
三生でも、四生でも、五生でも、十生でも、二十生でも、三十生でも、
四十生でも、五十生でも、百生でも、千生でも、十万生でも、また多数
の破壊の劫でも、多数の創造の劫でも、多数の破壊と創造の劫でも [記
憶したのである]。「そこでは、このような名があり、このような姓があ
り、このような[皮膚の] 色があり、このような食べ物があり、このよ
うな楽と苦を経験し、このような寿命があったのである。その私は、そ

こから死んで、あそこに生まれた。そこでも、このような名があり、このような姓があり、このような〔皮膚の〕色があり、このような食べ物があり、このような楽と苦を経験し、このような寿命があったのである。その私は、そこから死んでここに生まれかわっているのである」と。このように具体的に、明瞭に、種々なる宿命を記憶するのである。バラモンよ、これが、夜の初分に私が証得した第一の智である。怠けることなく、熱心に、自ら励み、住む人には、無明は滅ぼされ、智が生じたのである。闇は滅ぼされ、光が生じたのである。

これは「四諦型三明説」による成仏伝承の内容の一部となる。この成仏伝承において、菩薩が初夜に宿命智によって過去に遡って記憶する内容は (1) 名 (2) 姓 (3) 〔皮膚の〕色 (4) 食べ物 (5) 楽と苦の経験 (6) 寿命となっている⁽¹⁶⁾。この形式は、先述したMAPにおける七仏の事蹟の形式と類似する。両者は連動して成立したものと思われる。さらにパーリ註釈書の〔資料4〕の内容の一部とも関連性がある。

なお、MAP 所載の「ヴィパッシン仏伝」の成道場面には、三明説を用いずに縁起の認識で成仏を述べる「縁起成仏説」が伝承されている⁽¹⁷⁾。したがって宿命智にも言及がない。しかし、上座部大寺派では、「縁起型三明説」が正統な成仏伝承として確立されるに至った。上座部大寺派で、過去七仏と宿命智との関連が重要視されるようになる背後にあるものとして、この成仏伝承の変容が挙げられる。

まとめ

後代に付加されたMAPのプロローグである「宿命（過去の生存）に関わる法話」およびこれに対するパーリ註釈書の内容を検討した結果、上座部大寺派では、過去七仏と宿命智との関連性が重視され、結果的にMAPは、「仏が備える宿命智の偉大さを示す経典」として位置づけされるようになった

たことが明らかとなった。また、このことには、「縁起型三明説」を正統な成仏伝承とするに至る、部派内での成仏伝承の変容が関与している可能性を指摘した。

一方、北伝仏教の部派である法蔵部においても、過去七仏と宿命智との関連性が認められることを述べたが、これについても成仏伝承の変容が関わっている可能性はあるであろう。¹⁸

註

- (1) 本稿では、以下の諸本を総称する際、大本経と表記する。
 - ・ *Mahāpadānasuttanta, Dīghanikāya*, vol. 2, PTS, pp. 1-54. (上座部大寺派帰属) = MAP
 - ・ *The Mahāvadānasūtra A New Edition based on Manuscripts discovered in Northern Turkestan*, T. Fukita(ed.), Göttingen, 2003. (説一切有部帰属) = MAV
 - ・ 『長阿含経』 卷1 「大本経」 仏陀耶舎・竺仏念訳 (412~413年訳出, T1, no1, pp. 1b-10c) (法蔵部帰属) = 『大本経』
 また、以下の諸本は、その内容構成が、大本経と部分的に一致するものである。そのため大本経の成立過程を考察するうえで重要な文献となる。詳細は [天野信2010a] [天野信2014] 参照。
 - 『七仏経』 法天訳 (10世紀後半訳出, T1, no.2, pp. 150a-154a)
 - 『毘婆尸仏経』 法天訳 (10世紀後半訳出, T1, no. 3, pp. 154b-159a)
 - 『七仏父母姓字経』 失訳 (T1, No. 4, pp. 159a-160a)
 - 『増一阿含経』 卷45僧伽提婆訳 (397~398年訳出, T2, no. 125, pp. 790a-791b)
- (2) 相違点はあるが, MAV, 『大本経』 とともに基本的な内容・構成はMAPと同じである。
- (3) [吹田隆道1993: 277] 参照。
- (4) [吹田隆道1993: 273] 参照。このことは、仏陀観の展開のうえで重要な指摘となる。仏陀観の展開についての詳細は [梶山雄一1996] 参照。
- (5) [吹田隆道1993] [吹田隆道2013: 65-69] 参照。MAPにおける「すべてのブツダの生涯は共通する」という概念は, dhammatā (skt. dharmatā, 意味は「法則」。『大本経』では「常法」と漢訳される) という言葉を用いて過去仏の事蹟を示すことで確立されている。この用語によって、諸仏の生涯の事蹟が法則化される。cf. [Rahula 1974] [玉城康四郎1977] [岡野潔1990] [天野信2009]

- (6) 『大本経』における七仏の事蹟は、(1)出現した時代 (劫) (2) (それぞれの過去七仏の時代における人の) 寿命 (3) 出自 (王族かバラモン) (4) 姓 (5) 菩提樹 (6) サンガの構成 (7) 二大弟子 (8) 侍者 (9) 子 (10) 父母および王都の名称について記載される (T1, p. 1c-3c)。

MAVにおける七仏の事蹟は、写本の欠損から、完全な復元はされていない。しかし章末のウッデーナの内容から以下の項目が伝承されていたことが確認出来る。(MAV, pp. 36-51)

- (1) 出現した時代 (劫) (2) 寿命 (3) 出自 (王族かバラモン) (4) 姓 (5) 菩提樹 (6) サンガの構成 (7) 二大弟子 (8) 侍者 (9) 息子 (10) 父母および王都の名称
- (7) [吹田隆道1993] 参照。
- (8) Atha kho tesaṃ bhikkhūnaṃ acira-pakkantassa Bhagavato ayam antarā kathā udapādi: ‘Acchariyaṃ āvuso abbhutaṃ āvuso Tathāgatassa mahiddhikā mahānubhāvatā, yatra hi nāma Tathāgato atite Buddhhe parinibbute chinna-papañce chinna-vaṭume pariyādinna-vaṭṭe sabba-dukkha-vitivate jātito pi anussarissati, nāmato pi anussarissati, gottato pi anussarissati, āyuppamāṇato pi anussarissati, sāvaka-yugato pi anussarissati, sāvaka-sannipātato pi anussarissati: “Evaṃ-jaccā te Bhagavanto ahesuṃ iti pi, evaṃ-nāmā evaṃ-gottā evaṃ-silā evaṃ-dhammā evaṃ-pañña evaṃ-vihāri evaṃ-vimuttā te Bhagavanto ahesuṃ iti pīti.” (MAP, p. 8)

さて、世尊が立ち去られてすぐに、比丘たちの間で次の談話が起った。

「友らよ、希有である。友らよ、未曾有である。如来に大神力があり、大威力があることは。実に如来は、般涅槃し、戲論を断ち、道を断たれ、輪廻を終熄させ、一切の苦を超越した過去の諸仏について、生まれを記憶し、名を記憶し、姓を記憶し、寿命を記憶し、両弟子を記憶し、弟子集会を記憶するということは。『かの世尊方はこのような生まれであった』とか『かの世尊方はこのような名であった、このような姓であった、このような戒を持っていた、このような法を持っていた、このような慧を具えていた、このように住していた、このような解脱をした』と」

Kin nu kho āvuso? Tathāgatass’ eva nu kho esā dhamma-dhātu suppaṭṭividdhā yassā dhamma-dhātuyā suppaṭṭividdhattā Tathāgato atite Buddhhe parinibbute chinna-papañce chinna-vaṭume pariyādinna-vaṭṭe sabba-dukkha-vitivate jātito pi anussarati, nāmato pi anussarati, gottato pi anussarati, āyuppamāṇato pi anussarati, sāvaka-yugato pi anussarati, sāvaka-sannipātato pi anussarati: “Evaṃ-jaccā te Bhagavanto ahesuṃ iti pi, evaṃ-nāmā evaṃ-gottā evaṃ-silā evaṃ-dhammā evaṃ-pañña evaṃ-vihāri evaṃ-vimuttā te Bhagavanto ahesuṃ iti pīti.”? Udāhu devatā Tathāgatassa etam atthaṃ ārocesuṃ yena Tathāgato atite Buddhhe parinibbute

chinna-papañce chinna-vaṭume pariyādinna-vaṭṭe sabba-dukkha-vītivatte jātito pi anussarati, nāmato pi anussarati, gottato pi anussarati, āyuppa-māṇato pi anussarati, sāvaka-yugato pi anussarati, sāvaka-sannipātato pi anussarati: “Evaṃ-jaccā te Bhagavanto ahesuṃ iti pi, evaṃ-nāmā evaṃ-gottā evaṃ-silā evaṃ-dhammā evaṃ-paññā evaṃ-vihāri evaṃ-vimuttā te Bhagavanto ahesuṃ iti piti.”? Ayaṃ ca h’ idaṃ tesu bhikkhūnaṃ antarā kathā vippakatā hoti. (MAP, pp. 8-9)

「友らよ、一体どうしてなのであろうか。如来にだけこの法の本質がよく洞察されており、その法の本質がよく洞察されているために、如来は、般涅槃し、戲論を断ち、道を断ち、輪廻を終息させ、一切の苦を超越した、過去の諸仏について、生まれを記憶し、名を記憶し、姓を記憶し、寿命を記憶し、両弟子を記憶し、弟子集会を記憶するのであろうか。『かの世尊方はこのような生まれであった』とか『かの世尊方はこのような名であった、このような姓であった、このような戒を持っていた、このような法を持っていた、このような慧を具えていた、このように住していた、このような解脱をした』というように。それとも神々が如来にこのことを告げ、そのため如来は、般涅槃し、戲論を断ち、道を断ち、輪廻を終息させ、一切の苦を超越した過去の諸仏について、生まれを記憶し、名を記憶し、姓を記憶し、寿命を記憶し、両弟子を記憶し、弟子集会を記憶するのであろうか。『かの世尊方はこのような生まれであった』とか『かの世尊方はこのような名であった、このような姓であった、このような戒を持っていた、このような法を持っていた、このような慧を具えていた、このように住していた、このような解脱をした』というように」と。しかし比丘たちのこの談話は中断された。

- (9) *Sumaṅgalavilāsini*, vol.2, PTS, pp. 407-480.
- (10) *Mahāpadānasuttanta-aṭṭhakathā* の翻訳については [片山一良2004] を参照した。
- (11) 『大本経』冒頭には以下のプロローグが存在する。
時諸比丘於乞食後集花林堂，各共議言。諸賢比丘，唯無上尊為最奇特。神通遠達，威力弘大。乃知過去無數諸佛入於涅槃斷諸結使消滅戲論。又知彼佛劫數多少，名號姓字，所生種族，其所飲食，壽命脩短，所更苦樂。又知彼佛有如是戒，有如是法，有如是慧，有如是解，有如是住。云何諸賢。如來為善別法性知如是事，為諸天來語乃知此事。(T1, p. 1b)
- (12) このことは [天野信2009] でも指摘している。
- (13) [榎本文雄1981] [榎本文雄1982] 参照。
- (14) [馬場紀寿2008: 27-88] 参照。
- (15) *Dvedhāvitaṅkasutta* (MN.no.19), *Mahāsaccakasutta* (MN.no.36), *Bodhirājakumārasutta* (MN.no.85), *Saṅgaravasutta* (MN.no.100) などにも

同内容の記事がある。[榎本文雄1982: 79] 参照。

- (16) 上座部大寺派以外の、各部派が伝承する阿含・律においても、宿命智による過去世の記憶について伝承されている。その内容・形式については [山口務1992] [山口務1992a] 参照。
- (17) [天野信2007] [天野信2016] 参照。
- (18) 成仏伝承が「縁起型三明説」に変化する動向は、上座部大寺派だけではなく、北伝仏教にも存在した。そのため北伝仏教の複数の文献に「縁起型三明説」が伝えられている。そして「縁起型三明説」は遅くとも7世紀には南アジアに広く普及したようである。[馬場紀寿2008] 参照。

略号および参考文献

PTS= Pali Text Society.

T= 大正新脩大藏經

天野信2007「*Mahāpadānasuttanta*における過去仏の成道記事」『仏教学研究』62・63合併号, 132-148.

天野信2009「『七仏経』成立をめぐる諸問題」『印度学仏教学研究』57-2, pp. 912-908 (231-235).

天野信2010「大本経における七仏の事蹟と浄居天の神」『印度学仏教学研究』58-2, pp. 928-923 (189-194).

天野信2010a「大本経成立をめぐる諸問題」『仏教学研究』66, pp. 72-97.

天野信2014「*Mahāpadānasuttanta*における四門出遊」『パーリ学仏教文化学』28号, pp. 1-20.

天野信2016「過去七仏と縁起成仏説」『印度学仏教学研究』64-2, pp. 810-805 (233-238).

榎本文雄1981「仏教における三明 (tisso vijjā) の成立」『印度学仏教学研究』29-2, pp. 939-936 (39-42).

榎本文雄1982「初期仏典における三明の展開」『仏教研究』12, pp. 63-81.

岡野潔1990「仏陀の永劫回帰信仰」『論集/印度学宗教学会』17, pp. 1-17.

梶山雄一1996「仏陀観の発展」『佛教大学総合研究所紀要』3, pp. 5-46.

片山一良2004『パーリ仏典 第二期 3 長部 (ディーガニカーヤ) 大篇 I』東京: 大蔵出版.

玉城康四郎1977「原始経典のdhammatāについて」『印度学仏教学研究』26-1, pp. 97-104.

馬場紀寿2008『上座部仏教の思想形成 —ブッダからブッダゴースアヘー』春秋社.

吹田隆道1993「『大本経』に見る仏陀の共通化と法レベル化」『渡邊文麿博士追悼記念論集・原始仏教と大乘仏教 (上)』京都: 永田文昌堂, pp. 271-284.

吹田隆道2013『ブッダとは誰か』東京：春秋社.

森祖道1984『パーリ仏教註釈文献の研究』東京：山喜房佛書林.

山口務1992「宿命通における心とかたちについて」『日本仏教学会年報』57, pp. 59-71.

山口務1992a「『般若経』における宿命智について」『真野龍海博士頌寿記念論文集般若波羅蜜多思想論集』東京：山喜房仏書林, pp. 25-45.

Gombrich, R. 1980. "The Significance of Former Buddhas in the Theravadin Tradition." *Buddhist Studies in Honour of Walpola Rahula*. London: 62-72.

von Hinüber, Oskar 1996. *A Handbook of Pāli literature*. Berlin.

Nitta, Tomomichi 2001. "The Meaning of the Former Buddhas in the *Mahāpadānasuttanta*." *Studies in Indian Philosophy and Buddhism* 8: 73-85.

Norman, K.R. 1983. *Pāli Literature*. Wiesbaden.

Rahula, Walpola 1974. "Wrong Notions of dhammatā (dharmatā)." *Buddhist Studies in Honour of I.B.Horner*. Boston: 181-191.

Storong, John 2001. *The Buddha A Short Biography*. Oxford.

キーワード 過去七仏, 宿命智, 大本経, パーリ註釈書, 成仏伝承